



遊びから学びへ：子どもたちからの出発

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 半澤, 真司, 北島, 裕二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008027

遊びから学びへ —子どもたちからの出発—

From Playing to Learning: Starting from the Recognition of Children

半澤 真司(Shinji Hanzawa)* 北島 裕二(Yuji Kitajima)*

私たちは、新1年生入学時に、肢体不自由児学級が開設となったことをきっかけに、「二人三脚」で子どもたちとともに「^{あそ}んで」きました。学校や教師が持っている枠組みに無理にはめていくのではなく、まず、子どもから出発することで、「遊び」こそ「学び」であるということが、見えてきました。

(キーワード：温かい関係 遊ぶ とともに楽しむ 自由な活動)

1. いい雰囲気なのです

2年生の3学期、いつもの休み時間、畳の上で、半澤（肢体不自由児学級担任）と子どもたち数人が囲んでカードゲームを楽しんでいます。別な場所ではパズルやオセロ、ダイヤモンドゲーム、すごろくに熱中し、となりのプレイルームからは子どもたちの歓声が聞こえてきます。

授業開始のチャイムがなり、子どもたちは教室へと散っていきます。決着が着かずゲームが続いているところもあります。「今、いいとこ、もう少し」とある子が言うと、K（学級担任）は、にっこり笑って「始めているからね」と言い、教室へ行きます。決着が着き教室へ向かうその子どもたちは、勝っていても負けていても満足している様子です。Kが授業を始めようとしたときには、いつしか全員が教室にそろい、集中している子どもたちの姿がありました。

「とにかく、いい雰囲気なんです。なんといいか楽しいのです」2年生最後の保護者との懇談会で、あるお母さんから学級について質問されたときの私たちの答えです。A君のお母さんからは「うちに子どもたちが遊びに来るのです

が、よくトランプをやっている、なんか大人の宴会みたいでみんな楽しそうなんですよね」という感想をいただいたことからわかるように、子どもたちには、内面からあふれてくる楽しさが感じられるのです。

「先生、勉強終わったら体育館で遊ぼうよ」「生き残りがいい」「ドッジボール」「かんけり」「できないよ」「そうだったね」「私、生き残りやりたくない」「じゃあ…」いつのまにか話し合いが始まり、みんなが満足できるように一生懸命に考え、ゆずりゆずられ、少数意見も大切に、決して多数決では決めないそんな雰囲気が子どもたちから生まれていることを私たちは実感しています。

2. 子どもたちとの出会い

車椅子で生活をする肢体不自由児学級（通称K学級）のBさんを含めて32人の子どもたちとともに、私たちは、2年間を学校の限られた時間ですが、いっしょに過ごすことができました。

子どもたちが入学してきた頃、私たちは、あちこちでおきるトラブルに走り回り、楽しく、落ち着いて生活できるような雰囲気は学級にはありませんでした。

学習が始まって、話を聞いている子どもた

* 比布町立中央小学校， 北海道教育大学情緒障害教育特別専攻科第3期（情緒課程14期）

ちは少なく、つつきあったり、前後左右遠くの人かまわず大声で話をしたり、立ち上がったたり、さわぐ子、走りまわる子、教室から出ていく子で教室は騒然としていました。次々と子どもたちは、からだの不調を訴えてきたり、あちこちでけんかが始まるという状態でした。

子どもたちの遊びも、一人一人みんな違うルールがあり、仲間同志で話し合って一定のルールで遊んでいる様子はほとんど見られませんでした。見かねてルールを確認したとしても、それは形式だけで、また、ただ走り回る子どもたちばかりで、いっしょに遊んでいてもけっして楽しいとは言えないものを感じていました。

3. 子どもたちからの出発

私たちがしなければならないことは、話している子を静かにさせたり、立ち上がる子、走り回る子、教室から飛び出す子をつれ戻して座らせることではなく、子どもたちが今どんな状態にあっても、「子ども一人一人をよく見ていくこと」であると考えました。

「子どもたちとのかかわりで私が感じているのは、子どもたちと話す機会、遊ぶ時間、そして、子どもたちとふれあう時間が少ないということです。子どもたちはふれあいをもとめていると思います。そして、いっぱい話したがっていると思います。だっこしてほしいと願う子が多いことに少し驚きを感じています。けっして、家庭のせいではないと思いますが、子どもに寄り添い、話を聴いていくことの重要性を感じています。そして、何よりも、子どもたちは遊びたがっていると思うのです。『遊ぶこと』より『勉強すること』を優先することが、学校に限らず、家庭でも多くはないでしょうか。『遊び不足』が子どもたちを不安定な状態に陥らせてはいないでしょうか。『遊び』と『学び』とは切り離しては考えられないものであると思うのです。また、学ぶことは本来楽しいものであると思うのです。そこに命の輝きがあると思うのです」

これは、2週間が過ぎたときの半澤の率直な

思いを記録した一部です。

私たちは、このような思いから「子どもたち一人一人との間に安心できる温かい関係を築き、いっしょに楽しい時間を過ごすことができたのなら、子ども自身で、友達との関係をうまく調整し、いっしょに遊び、学び、自律ある楽しい生活を築いていくことができる」と考え、実践をしていくこととしました。

4. 温かい関係をつくっていこう

「何を言ってもいい、どんな感情でもぶちまけられる、安心していられる場所です。自分を守るための身構えの必要のない、つまり、温かく、自由で安全なところ、自由にくつろいで、自分自身であることができるところなのです」と、大段¹⁾はロジャースの「援助的な関係を提供する態度」について言っています。

子どもたちに限らず私たち大人も、その活動の基盤となる心の居場所の存在が生活に大きな影響を与えていると考えます。私たちは、今の状態を受けとめ、子どもたち一人一人との間に安心できる温かい関係を築いていくことが必要であると考えました。

(1) H君について

①教室から出ていくH君

H君は、学習が始まると、すぐに教室から出ていき、ほとんど教室にいたることがありませんでした。教室から出ていった後、H君は、トイレを見て歩くのが好きで、半澤といっしょに、学校のトイレを探検して歩くようになりました。特に、トイレについているマークを確認してあることがH君の「こだわり」でした。1日に3～4回トイレまわりを楽しむという日が約3か月ほど続きました。

②居場所を保障して

1学期終わり頃から、H君のトイレまわりの回数はへり、1日1回で満足するようになってきました。マークの確認も徐々に簡略化されていきました。

秋には、教室からそっと出ていったとしても、

トイレへは行かず、となりの「K学級」に行くようになりました。H君は、紙を見つけて「ゲームの絵」を描いて、一日過ごすということが多くなりました。時々、描いた絵についての話を聴くというかわりでした。K学級がH君の居場所となるにしたがって、徐々に、私たちとのコミュニケーションがスムーズになっていきました。学習課題の提示に対しても、K学級でなら、受け入れてくれることが多くなっていきました。

2年生になるころには、一人水遊びを長時間楽しんだり、学級の話し合いに参加したり、他の子どもたちとゲームに参加するなど、活動的になっていきました。K君とはゲームの話で気が合うようで、じゃれあっている場面も見られるようになりました。

③教室に入って学習し始めた

他の子どもたちとのかかわりが増え、H君の周りでトラブルが起き始めました。それがもとで、学級会の議題になり、意見を言わなければならない場面がでてきました。「話し合いがあるんだけどどうする」と声をかけると「ぼくいくよ」と言って席に座り、自分の意見を言うことができました。

2年生の3学期、学習を始めるというKの呼びかけに、H君は他の子どもたちといっしょに教室へ入り、席に着きました。それからは、教室から出ていくことはなくなり、教室でみんなといっしょに学習をするようになりました。

(2) Y君について

①教室をうろうろとするY君

Y君は、私たちが課題を提示しても、意欲を示すことなく、立ち上がり、教室をうろうろと歩いていました。特に何かをやりたいというわけでもなく、なんとなくあてもなく教室の中をさまよっているという状態でした。

学級で鬼ごっこなどするときには、仲間に入れず、「いっしょにやろう」と声をかけると逃げて行ってしまいました。

②受けとめていこう

H君と私たちとのやりとりを見ていたのでしょうか、Y君がそっと近づいてくるようになり、学習中、教室の後ろで座っている半澤の膝の上で時間を過ごすようになりました。半澤がH君とK学級にいと、Y君は教室をぬけだしてやってくるようになり、いっしょに時間を過ごすようになりました。

③毎朝お茶を飲みに来る

毎朝、Bさんは、前日のことを話しに、職員室へ来ていました。それを見ていたのでしょうか、Y君もいっしょに来て来るようになりました。(Bさんは1か月ほどで来なくなりました) Y君は、それから約1年間、半澤の机の下にもぐりこんだり、お茶の残りを飲んだりして過ごすようになりました。

④みんなの中で過ごし始めた

1年生の終わり、学級の図工で自画像を描きました。Y君は水色のクレヨンを使って、鬼のような青い顔を描きました。Y君はこれが自分だと言いました。2年生になり、1学期も終わろうとする頃でした、いつものようにK学級で過ごすY君が紙に人の絵を描きました。それは笑顔の全身像でした。Y君は「これ先生だよ」と言って見せてくれました。この頃から、Y君はみんなの中で過ごし始めました。休み時間も誰かといっしょに遊んでいることが多くなってきました。

2学期の中ごろ、K教室で「九九」や「かさこじぞう」などの“勉強会”を始めたところ、算数や国語の苦手なT君やBさんなど数人に混じって、Y君も参加するようになりました。また「ひらがなの書き方を教えて」と言うようになるようになり、いっしょに練習をするようになりました。毎朝来ていた職員室にも姿を見せない日が出てきました。

そして、2学期の終わりには「今日は教室で勉強する」と言って、“勉強会”に参加せず、教室で学習するようになっていました。朝の職員室にも、もう来なくなっていました。

(3) 多くの子をだっこしながらの授業

多くの子どもたちが、私たちの周りに集まってきました。Hさん、S O君、M君、N君は、私たちのからだがあいていると、すぐだっこを求めてきていました。休み時間は誰かをだっこしながら、オセロやトランプをしていました。

学習中もY君のだっこをきっかけに、ひとりふたりとやってきて、だっこしきれなくなり、教室の後ろでみんなで体をくっつけあいながら、聞いていることもありました。

何人もだっこしながらの学習がそれからしばらく続きました。

5. 子どもたちとともに遊び、楽しもう

遊びは子どもの活動のそのものであると私たちは考えます。しかし、放課後の友達同志の関係が稀薄であったり、学校では、チャイムとともに強制的に切られてしまうなど、子どもたちは思いきり遊びに熱中できる時間が少なくなっていると思うのです。

そこで、私たちは、既成の枠にこだわらず、自由な活動を見守り、思いきり遊び、いっしょに楽しむことが、子どもたちには必要であると考えました。

(1) 自由な遊びの場所

K学級は自然に子どもたちが集まってくるようになり、自由な遊び場になっていきました。子どもたちは、思い思いに遊び始めました。いろいろなことを話しかけてくれました。

①その子と向き合いオセロ対決

子どもたちとは多くの時間をオセロで楽しみました。子どもたちはどうしたら勝てるのかを考え、作戦を立ててくるなど、徐々に手ごわくなり、2年生になるころは、私が一手置き方をまちがえると負けてしまうまでに、子どもたちは上達していました。

M君は自分の思い通りにならないと、怒って、教室から飛び出したり、周りの人に当たり散らすような子どもでした。S I君は普段はとて

にこやかなのですが、何か気にさわるようなことがあると突然暴力的な行動に出て、周囲の子どもたちとトラブルを繰り返している子どもでした。

教室を飛び出していったM君や興奮がおさまらないS I君とオセロをしたことからかかわりが深まっていきました。休み時間のたびにオセロをしにやってくるようになりました。特に2人は、私はかなわないぐらいに強くなりました。オセロでの関わりが深まるにつれて、2人は他の子どもたちとのかかわりが穏やかなものになり、トラブルの回数も減っていきました。

②みんなで輪になりトランプ遊び

子どもたちとは、また、多くの時間をトランプで楽しみました。男子も女子もこだわりなく、次々に加わり、輪が広がっていきました。

私たちは、いっしょにやりながら、それぞれに違っていたルールを整理し、新たに提案し、一つ一つ確認し決めていきました。ルールに従って遊ぶことが実は楽しいということは、すぐに、子どもたちに伝わっていったようでした。「またやろうね」と言って、教室へもどっていく様子から、勝っても負けても、子どもたちはとても楽しかったということを感じることができました。

トランプは子どもたちの楽しい遊びの一つとして定着していきました。子どもたちは「来るものは拒まず、去る者は追わず」と言っているかのように、上手に遊びの輪を保ち、緊張感と笑い声にあふれる仲間づくりをしていっているように感じられました。

(2) ルールに従って

外でも遊びました。初めはブランコなどの遊具でそれぞれに遊ぶことが多かったのですが、1年生の秋、生活科の時間に「ルールを守って楽しく遊ぶ」という目的で「缶けり」を提案しました。ルールは、少しずつ子どもたちと話し合い、確認しながら確立していきました。子どもたちはすぐに、その魅力に引き込まれていきました。それから、雪が降って寒くなるまで、

暖かい天気の良い日は「缶けり」を楽しみました。

その年の冬には、バラバラだったルールを整理し、「生き残り」や「手つなぎ鬼」など楽しむことができました。

2年生の夏には「Sけん」で遊びました。転び、倒され、引きずられ、泣いていたHさんや、ふだん静かで、あまり自己主張をすることがないNさんも、いつのまにかチームの先頭に立って、敵陣に向かっていました。

6. 子どもたちとともに話し合い決めていこう

子どもたちはそれぞれに思いや願いをもち、それを実現させようと、自己を主張し、他とぶつかり、お互いを認め合いながら、意欲的に活動をしていくのが本来の姿であると考えます。

しかし、生活の様々な場面で大人が干渉し、指示に従わせ、考えに合わせようとし、子どもたち自身で考え、決定していく体験があまりにも少なくなっていると思うのです。高橋²⁾は「みんなが自分の意見を持つことの素晴らしさを、それらをできるだけ全てを取り入れる民主主義の生活のルールを実践させてやりたい」と言っているように、私たちは、学級に関わることや生活で起きた問題を、自分たちで考え、話し合い、決定していく活動を通して、子どもたち一人一人の願いや思いが認められ、集団の中で自己が実現されるように援助していくこと、また、責任ある自由の厳しさを伝えていくことが必要であると考えました。

私たちは、子どもたちといっぱい遊ぶのと同じくらいに、話し合いにも多くの時間を費しました。学級で話し合っほしい議題を、いつでも用紙に書き込めるようにして受け付けていました。「運動会の走る順番や紅白の組分け」「学芸会の出し物」「必要な係や当番」「座席の配置」「給食の準備を始める時刻」「ひまわりの種をどうするか」「カレーづくりについて」「K学級のあとかたづけ」「友達同志のトラブル」に至るまでなんでも議題として取り上げ話し合いを

しました。私たちも、子どもたちと同じ1票をもつ学級の一員として、話し合いに参加し、気になることを議題に出したり、企画があれば必ず提案をして進めていきました。

7. 「遊び」から「学び」へ

2年間にわたるかかわりから、自由な環境の中で、子どもたちは、自己を発揮し、意欲的に活動をしていくことがわかりました。

子どもたちの自由な時間は、「遊び」そのものであったと思います。子どもたちは、遊びの輪を広げていきました。また「K学級」はH君やY君にとっての居場所となり、先生となかよしになれる場所になっていきました。その関係を拠点に子ども同志の関係を築いていきました。さらに、子どもたちは、けんかや仲直りをくり返しながらかつ仲間をつくっていきました。何か学級で問題が起きれば話し合い、自分たちで解決していきました。

いつしか、子どもたちは集まって遊ぶようになり、集中して学習に取り組むようになりました。他の学級が授業時間中のときは、迷惑になることを考えてプレイルームでは音を立てたり、遊んだりしないように自主的に規制をしていました。つい興奮してしまい大きな声をあげてしまい、周囲に注意されても、子どもたちは、「ああそうだった」と素直に聞き入れることができるようになっていました。

このように、自律ある子ども社会を、強制的でなく、子どもたち自身の手で、自然に創りあげていったことに、私たちは、その意義を感じています。

遊びを通して、私たちには計り知れないほど様々なことを、子どもたちは学んできたと思うのです。学校の目標となることが多い「集中力」「創造性」「真剣さ」「粘り強さ」「チャレンジ精神」「協調性」などは、子どもの「遊び」から育っていくものであると思うのです。何よりも子どもたちは輝いています。この輝きをいつまでも絶やすことのないように、子どもたちと

ともに思う存分に遊び、「学び」を楽しんでいきたいと思うのです。

文献

- 1) 大段智亮(1985)：人間関係の条件～続・わたしの助力論、医学書院
- 2) 高橋 敷(1989)：遊ぶ力と生きる力、朱鷺書房